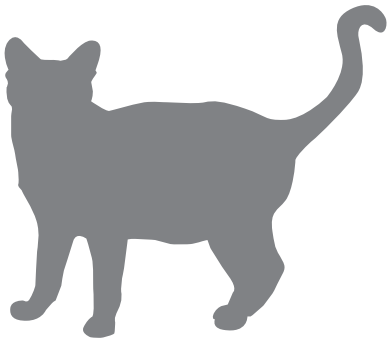


読書感想文コンクール
「わたしの漱石、わたしの一行」

〈中学生の部〉
・最優秀賞……16
・朝日新聞社賞……17
・紀伊國屋書店賞……19
・新潮社賞……20
・東京理科大学賞……22
・二松学舎大学賞……23
・佳作……25

〈高校生の部〉
・最優秀賞……37
・朝日新聞社賞……38
・紀伊國屋書店賞……40
・新潮社賞……41
・東京理科大学賞……43
・二松学舎大学賞……44
・佳作……46



令和3年度新宿区夏目漱石コンクール
読書感想文　中学生の部

最優秀賞

不安定な正しさ

九段中等教育学校　3年
海老原　朱里

作品名『坊っちゃん』
選んだ一行
履歴なんか構うもんですか、履歴より義理が大切です。

これは赤シャツとの一件後、辞表を出した山嵐を追って校長に辞表を提出したときに坊っちゃんが言った言葉だ。この言葉をそのままに捉えると、かっこいいと思うかもしれない。自分の損など考えず、ただ一緒に戦ってくれた山嵐への義理を大切にしている。私もかっこいいという理由だけでこの一行を選んだ。そして私なりにこの言葉を考えてみたのだ。しかし、考えれば考えるほどこの美しい言葉は、形を崩し全く別の意味に変貌してしまった。まず義理という曖昧なイメージのものに明確な意味をつけてみた。この義理が辞書の通りなら人間のふみ行うべき正しい道という意味になる。ならば、坊っちゃんは正しい道を突き進むために、自分の履歴も生活もかえりみず辞職したのである。ただ、それは学校の迷惑を考えず強行突破した道ではないかと私は思った。それは誰もが認める正しい道か、義理なのか、そう考えずにはいられなかった。作中坊っちゃんは人に褒められるようなことをしているとは言い難い。あんなに強い信念を持ち、義理を重んじる人がなぜこうも損ばかりしているのか。その矛盾に気が付いたとき、私は漱石の考えに触れたような気がした。坊っちゃんが言った義理に隠れた本当の意味は感情だと私は思う。人として正しいことではなく、自分が正しいと思うことを守ったのが坊っちゃんなのだ。坊っちゃんの生き方はかっこいいはずなのに、心からかっこいい人物だと言えないのはそこからきているのかもしれない。この作品は一人称視点だからあまり感じなかったが、坊っちゃんの考え方は矛盾していると今は思う。坊っちゃんが貫きたかったのは道理でも義理でもない、自身の感情だ。ところが、彼は自分に足りないところがあることを知りながら、自分の信条だけは間違っていないと信じて疑わなかった。個人的な感情を人間の正しい道だといえるだろうか。漱石が坊っちゃんを書くうえで考えたのは、美しい言葉の曖昧さと共存の社会における個人の感情を貫くことの不安定さではないか。理性と感情の感情だけを取った

ような坊っちゃんはその他大勢の考えより自分の考えのほうが正しいと思っている。その根本には「義理」や「理屈」のような正しいとされる美しい言葉があったから。正しさは一人一人の考え次第でその形は変化してしまうのに。そしてその正しさを周りが必ず受け入れてくれるとは限らない。だから、坊っちゃんの周りは常に変動していて不安定だ。

この作品は正しい人間が損をしてしまうような社会を風刺しているのかと思っていた。しかしたった一行の文章を深く考えることで新しい視点を持つことができた。私はこの作品を読んで、正しさほど不確定で曖昧なものはないと強く思った。それでも自分の中の正しさと出会えたとき、また坊っちゃんを読みたいと思う。そうして坊っちゃんの正しさについてまた新しい視点が持てることを楽しみにしよう。

審査講評

「履歴より義理」を抜き出した後に、その義理とは仮面をかぶった「感情」であると看破するところが小気味よい。文章も整っており、説得力がある。

令和3年度新宿区夏目漱石コンクール
読書感想文　中学生の部

朝日新聞社賞

漱石が選んだ普通

日本女子大学附属中学校　2年
阿部　珠美怜

作品名　『吾輩は猫である』
選んだ一行
吾輩は猫である。名前はまだ無い。

あまりにも有名すぎる一文である。

そもそもこの文が記されている『吾輩は猫である』はただの本ではない。猫の視点で書かれているのだ。私が初めてこの本を読んだのは確か小学校四年生くらいであったが、衝撃を受けたことを今でも覚えている。思い浮かんだのは、細かいということであった。普通に生きていては気づけないような猫に起こりうることが書かれていたのである。漱石はただ「吾輩」に起こった事柄を猫の視点で書くだけではなく、一つ一つの言動をまるで実際に体験したかのように丁寧に書き

とめている。そして、もう一つ気づいたことがある。吾輩が自分を客観視していたことだ。自分のことを語った物語のはずなのに何故か他人事のように聞こえた。興味がないようにも聞こえた。まるで、名前がないことすらどうでも良い、だから何だ、とでも言っている気がしたのである。漱石が「名前はまだ無い」と言い切れるのは、だからなのではないかと考えた。

『吾輩は猫である』は漱石のデビュー作であった。もうすぐ子供が生まれる時に命じられたイギリスへの留学で、神経衰弱をこじらせた漱石が気分転換に書いた一冊らしい。私は気分転換にしては大掛かりな一冊だとはじめは思っていた。でも実際は、気分転換だったからこその一冊なのであろう。第一に猫の視点から、という一風変わった考えは簡単に思い付くものではない。悩みが尽きない人間であることに疲れてしまった漱石は、自由気ままに生きているイメージのある猫になりきることによって現実逃避をしていたのかもしれない。名前がないのは、呼び方だけに頼らずに自分をしっかり持って本来の吾輩を見つめるためであろう。それに精神的に疲れていた漱石は、自分のことを客観視したくてこの物語を書いたのではないだろうか。そうすることによって自分の悩みなど世界規模で見たらちっぽけで気に病む必要はないという自己暗示をしていた。こう考えると、吾輩は漱石の写し鏡になっているようにも見える。

漱石の文章は「普通」にとらわれない力がある。普通だったら語り手は人間で、普通だったら登場人物には名前がある。そんな普通を蹴破って人々を驚かせてきた漱石は時代を超えて愛されている。

例えば、昔は夜は暗いのが当たり前だったが、今では夜でも街は明るいのが当たり前だ。マスクをつけて外に出るのも当たり前になった。そうやって、普通であることが普通でなくなり、逆に普通ではなかったことが普通になる。それが時代の流れというものなのだ。しかし普通とは一体何なのか、果たして本当に普通であることが良いことなのか。漱石の人生の背景と共に考えさせられる一行である。

審査講評

誰もが知っている有名な一行をどのように料理していくのか、読みながらワクワクした。「吾輩は漱石の写し鏡」といった分析や見事な理論展開に感心させられた。

令和3年度新宿区夏目漱石コンクール
読書感想文　中学生の部

紀伊國屋書店賞

感奮興起

日本女子大学附属中学校　2年
伊東　千織

作品名『二百十日』
選んだ一行
不公平な世の中に生れゝば仕方がないから、世の中がしてくれなくても何でも、自分でならうと思ふのさ

不公平な世の中に生れゝば仕方がないから、世の中がしてくれなくても何でも、自分でならうと思ふのさ

この作文を書いている私のもとに、一通のメールが届いた。学校からだ。「夏休みの今後の部活動を中止します。」何回目だろう。私の中学校生活は、こんなことばかりだ。

そんな時、私の選んだ一行が叫びだす。私は、明治時代の身分制度云々と今まで書いていた紙を破り捨て、黙々と書き始めた。この一行は、急に現実味を帯び、私に迫ってきたのである。

「二百十日」この小説は、圭さんと碌さんという二人の男が、二百十日の嵐のなか阿蘇山登頂を目指す物語だ。二人の軽妙な会話が成り立たせる笑いあり哲学ありの話で、会話文主体の構成は、いつもの漱石作品と少し違う。

圭さんは、貧乏育ちの豆腐屋だが、志は高い。横暴な華族や金持ちを批判し、公平な世の中にしようと息巻く人物だ。そんな圭さんが放った言葉が「わたしの一行」。圭さんのそして漱石の思いが伝わってくる。世の中が不公平なのは仕方ない。だが、最初から諦めずに、自分の「こうなりたい」という思いを一番大切にして努力するべきだ。その思いさえあれば、低い身分の豆腐屋でも、不公平など打破して何にでもなれるんだと。

四民平等とはいえ不平等が残る明治時代。圭さんのいる明治と私がいる令和。時代や背景は違えど、世の中に流れる不公平感の中に生きているのは同じだ。身分格差に比べれば些細であるが、私が冒頭で感じた不公平感もたった三年しかない中学校生活を我慢ばかりで過ごす私にとっては、切実な不公平である。なぜ、部活の公演は練習すらできないのにイベントはできるんだ！校歌斉唱は一度も許されないのにＴＶではマスクなしで歌うんだ！コロナ禍で、世の中の不公平さを各々の立場で誰もが感じている。いつの世も同じだ。しかし

この一行を復唱しよう。不公平に憤りながらも、軽口を叩きながら兎に角やろうと時に人を煙に巻く圭さんだが、この一行に圭さんの希望の原動力が詰まっているように思う。自分に問いかけた。そうだ、がっかり立ち止まっている自分では駄目だ。世の中が自分の良いように変わってくれるのを待つのではなく、自分から動かねば。まずは自主練するか。深呼吸をして立ち上がった。今より格差があった時代に、志を持ち不公平を打破しようとした圭さん。漱石は圭さんのような「突破する力」が必要になると見抜いていたのかもしれない。碌さんの包容力、二人が意見を言い合い助け合う対等な友情も現代に必要だ。

不公平のせいにして逃げることなく、自分の思いをエンジンにして不公平という雲を突き破り、自分の可能性の空へ飛び立ちたい。兎に角いってみよう

審査講評

コロナ禍で自身が感じている辛さや不合理を上手く絡めて作品を読み解いている。選んだ一行をバネに、前向きに生きる力に転換させていく文章の流れが秀逸である。

令和3年度新宿区夏目漱石コンクール
読書感想文　中学生の部

新潮社賞

名前のない「文鳥」

獨協中学校　3年
鳥海　睦久

作品名『文鳥・夢十夜・永日小品』
選んだ一行
「三重吉の小説によると、文鳥は千代千代と鳴くそうである。」

僕は物心ついた頃からいつの間にか鳥が好きになっていた。おそらく最初は、空中を飛べるなんてすごいなという単純な理由からだが、徐々に鳥が神秘的で美しく、賢い生き物だと惹かれるようになった。小学生の頃、図書室で分厚い鳥の図鑑を借りて帰ったら、それほど興味があるのかと両親に驚かれたことがある。双眼鏡とカメラを持って野鳥園に行ったり、鳥の博物館に行って一日過ごしたりもする。当然、鳥の鳴き声にも興味がある。

今回、夏目漱石の作品を選ぶ際にも、迷わず「文鳥」を選んだ。冒頭で、馴染みのある「早稲田」という地名が使われていることに親近感が湧いた。そして、「三重吉の小説によると、文鳥は千代千代と鳴くそうである。」の一文だ。鳥の鳴き声を表現する時、一般的にはカタカナを用いて「チュンチュン」などと書き表すと思う。それを「千代千代」と漢字で表現しているのが趣があって、とても気に入った。また、文鳥のかわいらしい姿や生き生きとした動作を頭の中で鮮明に想像することができ、僕も文鳥を飼ってみたいと思わされるほどだった。暖かい書斎で主人公が忙しく筆を動かして小説を書いているのに対して、寒い縁側で文鳥がおとなしくじっとしている様子など、文鳥を中心とした文章を読んでいくうちに、その場の音や温度が伝わってくるかのような臨場感を味わうことができた。

物語自体は淡々としていて短く、面白いことが起こるわけでもないけれど、主人公の寂しさや悲しさのようなものを感じる不思議な展開だった。始めの頃は、飼い慣らそうとして、自分の指から直で餌を食べさせようと試みることもあったのに、文鳥の結末については、主人公は酷いと思った。文鳥に対する愛情はあったにも関わらず、面倒で世話をしなくなり数日放ったらかしにして死なせてしまった挙句、それを家人のせいにしてしまう。もしこれが、現代に書かれた内容だったら、動物虐待などと指摘されかねないくらい酷いと思った。しかし、主人公に対し怒りを感じるというよりは、主人公が抱いたであろう喪失感に感情移入してしまった。なぜならきっと、主人公も自分が悪いことはわかっていて、その感情をどうすることもできずに八つ当たりしたのだと思うからだ。

僕がひとつ疑問に思ったのは、どうして主人公は文鳥に名前をつけなかったのか、ということだ。主人公は文鳥に、昔知っていた女性の姿を重ねていて、その詳しい関係は語られていないけれど、「この女は今嫁に行った。」と書いてあり、ここにも喪失感のようなものが描かれている。あえて文鳥に名前をつけず、親しかった女性の名前も書かないことで、文鳥と女性を重ねて表現しているのかなと思った。最後に、三重吉が主人公に宛てた文章から、主人公の寂しさを思いやる様子が伝わってきてあたたかい気持ちにもなった。

審査講評

「鳥好き」である書き手の、文鳥やその飼い主・漱石に対する温かなまなざしが伝わってくる。文章力も高く、書斎の漱石と鳥籠の文鳥の様子が映像として浮かんでくるようだ。

令和3年度新宿区夏目漱石コンクール
読書感想文　中学生の部

東京理科大学賞

心のよりどころ

大妻中学校　1年
金成　璃奈

作品名『坊っちゃん』
選んだ一行
汽車が余程動き出してから、もう大丈夫だろうと思って、窓から首を出して、振り向いたら、やっぱり立っていた。何だか大変小さく見えた。

子供の頃から無鉄砲で喧嘩っ早い主人公、坊っちゃん。そんな性格から、両親と兄からは冷淡な態度であしらわれていた。だが、ただ唯一自分のことを理解して可愛がったという人物、それが下女の清だった。

初めはその清からの愛情を不審に思い、気味悪がっていた。しかし、その愛情を理解して受け取っていたことが分かる一文がある。それが、「汽車が余程動き出してから、もう大丈夫だろうと思って、窓から首を出して、振り向いたら、やっぱり立っていた。」という文だ。東京を離れる坊っちゃんを停車場まで送りにくる清。「やっぱり」というところから、清が最後の最後まで見送っていることを坊っちゃんが当然のように信じていたと読み取れる。血のつながりがないにも関わらず、それを超える二人の絆が感じられた。その後「何だか大変小さく見えた。」と続くが、その短い一文には、たくさんの清に対する坊っちゃんの気持ちが込められていると私は思う。自分がいなくなったら清はどうなるのか。一人で清をここに残しておいて本当に大丈夫なのだろうか。そんな不安と、今までずっと近くにいた人と別れるということを、窓から見える小さな清の姿からより強く実感し、寂しさを感じていたのだろうと。たった十一文字で色々なことを読者に考えさせ、また伝えることができる夏目漱石という人物に、改めてすごいなと驚かされた。この二文は私の心に深く残るものであった。そうして東京から松山に行き、数学教師として着任した中学で、様々な人達との複雑な人間関係に悪戦苦闘していく。陰湿でずる賢い教頭。臆病で軽薄な同僚。そんなろくでもない人間と、彼らと比べると知恵や教養も少ないけれども、人間味のある清。その清こそが坊っちゃんが理想としている人間像なのだ。松山での生活は、清へのありがたさと、その温かい存在が、自分にとって必要不可欠であること

に気付く良いきっかけとなったと思う。また、私にとっても「正しい人間の在り方」について考えるきっかけとなった。離れていても決してちぎれない固い何か、そんなものが二人の間に見えた気がする。

人間という生き物は、誰しも心のよりどころとなるものが必要だと私は思う。清は坊っちゃんの心のよりどころとなる人物だった。そして坊っちゃんは清の心のよりどころとなる人物だった。物語の中で、「清はおれの片破れと思う」と坊っちゃんが言っている場面があるが、そう、まさに「片破れ」なのだ。お互いがお互いを支え合う。そんな関係を築けた二人はとても幸せだったのではないだろうか。

審査講評

赤シャツや野だいこなどと比較しながら、坊っちゃんの心の中にある清の存在意義を巧みに読み取り、人と人との絆は信頼に裏打ちされていることを上手く表現している。

令和3年度新宿区夏目漱石コンクール
読書感想文　中学生の部

二松学舎大学賞

夢と選択と人生と

新宿区立新宿中学校　3年
置田　琉菜

作品名『夢十夜』
選んだ一行

自分はどこへ行くんだか判らない船でも、やっぱり乗っているほうがよかったとはじめて悟りながら、しかもその悟りを利用することができずに、無限の後悔と恐怖とを抱いて黒い波のほうへ静かに落ちて行った。

「自分はどこへ行くんだか判らない船でも、やっぱり乗っているほうがよかったとはじめて悟りながら、しかもその悟りを利用することができずに、無限の後悔と恐怖とを抱いて黒い波のほうへ静かに落ちて行った。」私はこの一文が海の底までたどり着くぐらい心に刺さった。「どこへ行くんだか分からない船」これは『人生』を表しているのではないだろ

うか。人生は自分でも他人でもこの先どうなるのかは分からない。その中で一生懸命生きていく。それが『人生』というものだと思う。この主人公は自ら死という選択をした。自分が後悔していてもこの選択が合っていたのかそれとも間違っていたのか。それは分からないことだと思う。私たちも同じだ。生きていて選択をすることは日常茶飯事である。些細なことから重大なことまでさまざまだ。ただ一つ私は選んではいけないものがあると思う。それは自ら命を絶つことだ。どんなに楽しいことがあっても死んでしまえば全て終わってしまう。悪い事だけでなく幸せな事までもだ。そのため私は一つ一つの選択を慎重にしていかなければならないと思った。時間を戻すことは誰にもできない。一日二十四時間、決まったことだ。その二十四時間をどのように使うのかも選択だ。改めて考えるととても大切にしなければならないことだと感じた。

私は苦しみから逃れたいと思ったとき、暗い海に飲み込まれるのではなく、この文を思い出して私が海を飲み込んでしまうぞというぐらいに考えることにした。私の大切な人が同じような立場に立ったときも同じだ。これからの未来、選択することの連続だ。私は優柔不断な所がある。迷うこともちろんある。曇り空のように心も顔も晴れないことも。だが曇り空はいつまでも曇っているわけではない。私は将来、自分が太陽のような笑顔で、暗くなってしまった人の心を、月のようにやさしく照らせるようになっていたい。なれるかどうかは自分自身の気持ちで変わっていく。そのためにも船にふり落とされないようにしなければならない。いつか必ず来る海へ落ちるときには明るくてイルカが泳いでいたり、カラフルな貝のある海がいい。それまではきれいな青空が広がる空の下で笑っていたい。そして「無限の後悔」を抱かないようにしたい。ただの後悔であれば次回へと活かすことができる。しかし「無限の後悔」は次回がないように思えるからだ。私は「どこへ行くんだか判らない船」でも自分の力で目的地へと必ずたどりつく。幸せと希望を持ちながら。

審査講評

作品を自分に引き寄せ、自分の事として上手く捉え表現できている。率直に愛情や思いを表現しており、若者らしい考え方に爽やかさを感じられる。

令和3年度新宿区夏目漱石コンクール
読書感想文　中学生の部

佳作

愛情にあふれた一行

学習院女子中等科　2年
岡崎　明音

作品名『坊っちゃん』
選んだ一行
だから清の墓は小日向の養源寺にある。

坊っちゃんが四国に数学教師として赴任した後も、清のことを何かと思い出し、東京に戻るとまた清と暮らし始めます。何かにつけてはかわいがってくれる清が坊っちゃんにとっての心の支えであったことがよく分かります。一方、清は面倒をみてくれる甥がいるというのに、坊っちゃんが四国から帰ってくると坊っちゃんと住み、坊っちゃんのお墓に入りたいと望みます。清にとっても坊っちゃんのそばでお世話をすることが心の支えであったのです。坊っちゃんと清の血の繋がりをこえた絆を短く的確に表していることから、物語の最後の文章でもある一行が一番印象に残りました。

坊っちゃんの無鉄砲で、後先を考えない不器用な生き方にはハラハラさせられますし、やり方には問題があると思いますが、ひきょう者を許さない正義感を持ち、仲間思いの行動をとれることに好感が持てました。坊っちゃんがまっすぐで居続けることができたのは、清がどんな時も坊っちゃんのありのままの姿を認めてくれたからこそだと思います。

ありのままの自分を受け入れてくれる存在は大切です。ひとりでも自分を理解して受け入れてくれる人がいれば、どんなにつらくて苦しい時も頑張ろうと前を向くことができると思います。私にとっては、両親や姉や祖父母達がそのような存在です。私に何があっても、私の気持ちに寄り添ってくれると信じています。残された唯一の家族であるお兄さんとは両親が亡くなって家を畳んでからはもう会うことがなかったという坊っちゃんの家族関係を考えると、私が家族のことを信じられるのは、家族だから当たり前ということではなく、ありがたいことだと気付かされました。

私が最後の一行が好きな理由は他にもあります。それは「だから」という三文字で、坊っちゃんが四国で教師として過ごした約一年間の出来事が物語の大半であるというのに、様々な経験をした教師生活の話が坊っちゃんの無鉄砲な性格を説明するための長い前置きであるかのように私は感じられたの

です。清に大切にしてもらったことが坊っちゃんの人生ではとても大きく、坊っちゃんがありのままで居続けることができたのは清に対して家族のような愛情を感じていたということが最後に改めて伝わってくるため感動しました。もしかすると、清が亡くなった後の坊っちゃんは無鉄砲さが鳴りをひそめてしまったのではないでしょうか。坊っちゃんは架空の人物だというのに、ひとりぼっちになった坊っちゃんを思うと、清が空から見守ってくれることを支えにまっすぐさを失わずにいてくれたらいいと思わずにはいられません。

愛情にあふれていて、思いも膨らむ最後の一行が、私はやはり一番好きです。

令和3年度新宿区夏目漱石コンクール
読書感想文　中学生の部

佳作

ことばと後悔のこころ

大妻中学校　1年
田口　琴衣

作品名『こころ』
選んだ一行
とにかく恋は罪悪ですよ、よござんすか。そうして神聖なものですよ。

夏目漱石の「こころ」を読むことにした。まず、ひらがなの「こころ」に魅かれた。その言葉は、誰にでも想像できるような心を表しているようである一方で、どんな心に感じるのかを読者が試されているように思えた。

平成生まれでまだ13歳の私にとって、時代背景も言葉遣いも古く感じたが、私にとっての漱石が伝えたい心とは、「後悔」であると思った。人は生まれてから長い人生の間に沢山の行動をとり、沢山の言葉を発する。完璧な人間などいない

ので、時折自分の行動や言葉は自分自身に不利益をもたらし、後悔することがある。その不利益の程度にもよるが、対象が自身だけであれば、省みて教訓とすればよい。より困るのは、その対象が他者の場合である。自分の行動や言葉が他者を傷つけてしまった場合、それは後悔してもしきれない結果、最悪の場合「死」、になるかもしれないからだ。「先生」は友情ではなく恋を選んだ。それ自体は全く問題ないはずだ。しかしその選択により友人も先生自身も自殺してしまう。では、なにが悪かったのだろうか。それはやはり「言葉」であると思う。言葉には多要素があると思う。使う言葉そのもの、言葉を伝える方法（手紙・直接話す・電報・電話・伝言など）・言葉の短さ・長さ、言葉を発するタイミング、言葉を伝達する時の声のトーン。これらを総合して「言葉」なのではないか。先生がもし、言葉が持つ多要素を考慮して友人Ｋに自分の恋を伝えていれば、あのような後悔するような事態にはならなかったのではないか。誰かを愛するという、本来であれば神聖な行為が、言葉のミスにより友人と自分を死に至ら占める罪悪になってしまったのだ。

漱石は「こころ」を通じて、後悔をするような言葉のつかい方をしてはいけないと後世に警告しているのだと私は読み取った。本来言葉はすごい正の力を持っている。言葉の存在が教育・読書・コミュニケーション・生産活動を可能にしている。漱石が取り上げている言葉の負の面は、現代のＳＮＳ問題をも見通したものだと考えさせられた。彼は聡明な人物であったので、何十年も先の科学技術の進歩にもこの作品の中で密かに触れている気がする。ＳＮＳがコミュニケーションツールとして確立している今日において、言葉の正と負の力を改めて考えさせられ、人を傷つける言葉の使い方は絶対にしてはいけない、と強く感じた。「とにかく恋は罪悪ですよ、よござんすか。そうして神聖なものですよ。」なぜ漱石は恋を「罪悪」とも「神聖」とも言うのか。この二つの対照的な表現の裏にある言葉が影響を及ぼす「こころ」の動きがわかった気がする。

令和3年度新宿区夏目漱石コンクール
読書感想文　中学生の部

佳作

心の拠り所

暁星中学校　1年
酒井　啓太朗

作品名『坊ちゃん』
選んだ一行
「何だか清に逢いたくなった。」

「何だか清に逢いたくなった。」この一文が、僕が夏目漱石の坊ちゃんを読んで心に残った一行だ。清と別れて四国の片田舎の寂れた中学校の先生になった坊ちゃんだが、生徒にいたずらを仕掛けられ、少し塞ぎ込んでいた。この一文は、そんな坊ちゃんの心から零れ落ちた本音だと僕は思う。

だが最初、話を読んでいた僕が清に対して湧いた感情は違和感だった。町内では爪弾きにされ、両親ですら愛想を尽かしていた坊ちゃんに異常なまでの愛を持って接していく下働きの老女の清。はたから見たら気味が悪い。僕は良い子と言う訳ではなくどちらかと言うと悪ガキという部類の人間だ。だから誰にも認められず自分はろくな人間にならないとささくれだっていた坊ちゃんと同じ様に、清からの褒め言葉も素直に受け止める事が出来ずお世辞は嫌いだと僕は読んでいて思った。

しかし、坊ちゃんの四国での生活は東京の生活とはかけ離れており過酷を極めていた。そんな環境で坊ちゃんは色んな悩みを抱えることとなる。特に対人関係だ。四国と東京は場所が違う。すると当然人柄も違う。話がわかる者もいれば反りが合わない者も居る。時には喧嘩までしたり時には腹の中まで煮え繰り返る様な陰口を叩かれたりもする。そんな中でいつしか坊ちゃんはなんどもなんども清のことを思い出す。ここで初めて僕は坊ちゃんと同じ様に清の無条件な愛をやっと理解する。

やはり坊ちゃんが四国で揉まれた事は当人にとっても良かった事だと思う。清と別れた事によって自分はどうせろくな人間にならないと思っていた坊ちゃんが自分の良さを認める事ができたのだから。僕が選んだ一文は、坊ちゃんの心の支え、まさしく心の拠り所、「清」に逢いたいと叫ぶ坊ちゃんの素直な心を表した一文だ。この一文を読んだ瞬間に本当の意味で初めて坊ちゃんと清の想いが、心が繋がった気がした。この時坊ちゃんは人生で初めて、両親でさえも認めてく

れなかった自分の良い所を見つけ出してくれた清に対して感謝の気持を抱いたのではないだろうか。僕はこの一文、たったの一文に心を奪われた。

人は本当に大切な人と会えなくなってしまったり或いは失なってしまった時、それの大切さに気付く。人の心は脆い。ちょっとしたことですぐに壊れてしまう。だから絶対に人には最後の逃げ場が、心の拠り所が必要だと思う。人の短い一生の中で、拠り所を探す。人生とは自分だけのたった一つの拠り所を探す旅ではないだろうか、さあ旅に出よう。

佳作

呑気と見える人々も

東京学芸大学附属竹早中学校　1年
三田　知穂

作品名『吾輩は猫である』
選んだ一行
呑気と見える人々も、心の底を叩いて見ると、どこか悲しい音がする。

みなさんは、『吾輩は猫である』に出てくる、迷亭さんをどう思うだろうか。自分は、呑気だ、ちゃらけている、楽に生きていていいな。おそらくは誰でも、そう思うのではないだろうか。名前が、「めいてい」というのは、「酩酊」を、表しているのではなかろうか。そう読み進めていくうちに、ある一文に出くわした。

「呑気と見える人々も、心の底を叩いて見ると、どこか悲しい音がする。」

自分は、夏目漱石の、数ある作品の中でも、この文が一番好きだ。

まず第一に、テンポがとてもいい。『吾輩は猫である』は、全体的に、一文一文、テンポや言葉のセンスはとてもいいが、この文の良さは、読点でわけてみると、十二音十四音十二音と、まるで、俳句のようなリズムだ。さらに、丁度段落のはじめで、さらに、主人が来客と話している場面から、「吾輩」さんが、亡くなる最後の場面、というように、場面の切り替わりの位置にあるため、目につきやすい。よって、夏目漱石が強調したかった文のように、思えてくる。

第二に、登場人物の印象をがらりと変えるところだ。『吾輩は猫である』は、文章には山が無いといけない、というのが由来の、「山会」という文章会に出したそうだが、自分はこれこそ山ではないかと思う。迷亭さんは、世の中が楽しそうだ。独仙さんは、堂々としているうえに、悟っていて、まるで仙人のようだ、そういった、人間の勝手な偏見、これは、本の中であっても、現実であっても、頻繁に、おこりうる問題だ。そして、それを改めてくれる。そんなところが、この文は、とても素晴らしいと思った。

第三に、表現の面白さだ。「人の心の内を探って見る」ということを、「心の底を叩いてみる」、と表現している。しかも、なんの不自然さもなく、しっかりと意見が、つうじている。むしろ、わかりやすいぐらいだ。これは、凡人にはできない発想、技術だろう。この文により、夏目漱石という作家の非凡さや、たくみな表現術などが知れていい。この文により、夏目漱石の、あふれる文才を再確認できるのではないだろうか。

このように、この文を、登場人物だけではなく、身近な人間に、おきかえてみても、「偏見はよくない」、といった教訓的な意味合いが、見えてくるだろう。しかし、そんなこと考えなくとも、テンポよし、表現よしで、まさに「名言」だと自分は思った。

令和3年度新宿区夏目漱石コンクール
読書感想文　中学生の部

佳作

こころ

筑波大学附属中学校　2年
楠下　哲生

作品名『こころ』
選んだ一行
おれは策略で勝っても人間としては負けたのだ

僕が今回読んだのは「こころ」である。この物語の舞台は明治時代である。この本は一冊の中で上・中・下に分かれている。上・中では、「先生」と「私」の出会いや交流が書かれている。下では、先生の遺書を通して先生の過去が分かる。

先生は書生だった頃、未亡人（奥さん）のところに下宿していた。その未亡人の娘である静を先生は好きになる。先生はその下宿先にKという友達を連れてきて同居させるが、Kも静を好きになってしまう。先生は、奥手な男だったが、静がKの誘いに応じる姿を見て嫉妬する。Kから静への恋心を打ち明けられると、意地悪な対応をしてKを妨げる一方で、その隙に奥さんから静との結婚の許しを得てしまう。それを知ったKは落胆し、自殺してしまう。

僕の心に残った一行は、先生の遺書の中で、「おれは策略で勝っても人間としては負けたのだ」と書かれた部分である。先生は、Kの「静が好きである」という相談に対し、恋をすることが悪いかのように「精神的に向上心のないものはばかだ」などと説教し、Kを思いとどまらせようとする。そしてその一方で、奥さんに静を嫁にもらう話をつけてしまうのだ。静を手に入れるという意味では先生は「策略で勝った」が、それを知ってもKは平然としていた。先生に裏切られたことが分かっても、先生を責めたりしないKに対して「人間として負けた」と先生は感じたのだろう。

僕は、先生のやり方が、策略というよりも、あまりにわかりやすく酷い裏切りなので、驚いてしまった。よほど静をとられることが嫌で、取り乱したのだろうか。もし先生が「策略」を使わず、自分も静に好意を寄せていることをKに打ち明けたとしたら、先生がKを出し抜くことはなく、たとえその結果Kが静と結ばれなかったとしても、Kは絶望のあまり自殺することはなかったのではないだろうか。

一方、もし僕が先生に裏切られたKの立場だったら逆上してしまうと思うし、直接先生を卑怯だと責めると思う。むし

ろ、平然としていたKは特殊であると思った。Kは結局、先生に何も言わずに自殺してしまった。理由は、静との恋が実らないことを絶望したからなのか、先生に裏切られたことに絶望したのかは、わからない。もしも、Kが先生に対して怒りをむき出しにすることで、「人間として先生を負かさなかった」としたら、先生は素直に謝ることができ、長く思い悩んだ挙句に自殺をしてしまうほどまで、良心の呵責を引きずることはなかったかもしれない。

お互いに「こころ」のうちを見せ合わず、自分の内面を思い詰めるのが、明治時代の男性だったのだろうか。先生とKのどちらの立場に立って考えても、現代の僕たちにはない、体面や意地の「硬さ」のようなものを感じた。

令和3年度新宿区夏目漱石コンクール
読書感想文　中学生の部

佳作

「明治の木」と日本の文化

東京都立武蔵高等学校附属中学校　2年
安田　湖夏

作品名『夢十夜』
選んだ一行
遂に明治の木には到底仁王は埋っていないものだと悟った。

現在、日本の古くからの文化は海外で注目され、また国内でも人気がある。オリンピック・パラリンピックが日本で行われたこともあり、日本人の私たちは自国の文化を知り、学び、そして良さを再認識した。

寺院にある様々な像も、日本の文化の一つと言えるだろう。今からずっと前、平安時代や鎌倉時代などに作られた像には日本の仏教文化が良く表れている気がする。そんな像を鎌倉時代にいくつも彫った有名な芸術家と言えば運慶だ。運慶の

作る像は筋肉質で動きがあり、まるで生きているかのようである。

さて、「夢十夜」にはそんな運慶が登場する。鎌倉時代のような場所で、運慶は仁王を彫っている。しかし、それを見ている人々は明治時代の人間である。見物人の一人が「自分」に彫刻は「あの通りの眉や鼻が木の中に埋っているのを、鑿と槌の力で堀り出す迄」のものだと言った。「自分」はそうであれば誰にでも彫刻はできるから彫ってみようと思った。「自分」は家に帰り、薪にするつもりだった木を彫ってみた。けれど、仁王は彫れなかった。そして、「自分」は悟る。

「遂に明治の木には到底仁王は埋っていないものだと悟った。」

私はこの一文を、欧米の文化をまねて日本の文化に目を向けない当時の人々へのメッセージのように感じたから心に残っている。また、私はこの一文中の「明治の木」とは「明治の人々」のことを指すと思った。

「明治の木には到底仁王は埋っていない」とは、明治の人々には、古くから日本にある運慶の仁王のようなすばらしいものに目を向ける人がいないということを表しているのではないだろうか。また、明治の人々が古き良き日本のものを見ていないため、仁王が埋っていても埋っていないように思える、ということだとも考えられる。

明治時代、日本は鎖国をやめ、西欧の国々と関わるようになった。当時の人々は古くからある日本の美術品などをたくさん海外に売ったり、緩衝材として浮世絵で陶器をつつんだりした。私には、それらの行為が日本古来の文化をないがしろにしているように思える。きっと漱石も西洋の物ばかりで、日本に昔からあるものに目を向けない明治の人々に何らかの違和感をもっていたのだろう。

現在の私たちは、さまざまな場面で日本文化に触れている。だが、「触れている」と思っているだけで、本当はしっかりと見て、深くまで掘り下げ、そして感じることは出来ていないかもしれない。

果たして、令和の木には仁王は埋っているのだろうか。

佳作

持つべきもの

日本女子大学附属中学校　2年
飯尾　むつは

作品名『坊っちゃん』
選んだ一行
「清はこんな時に決して笑った事はない。」

「清はこんな時に決して笑った事はない。」

この一行は、坊っちゃんが、赤シャツに遠回しに嫌みを言われた時の胸の内を表した言葉だ。赤シャツが嫌みと共に嘲笑う様子を、坊っちゃんは清と対比している。私はこの一行から、人間が本来「持つべきもの」は、人間性であると改めて感じた。

赤シャツは、文学士で大学を卒業している。調べてみると、大正時代までは帝国大学のみが学士号を取得することが可能だったことから、赤シャツは、東京帝国大学出身だと分かった。大学の入学率さえも低かった当時の様子から、さぞかし赤シャツは多くの知識を持っていたのだと推測した。

それに対して清は、由緒ある家系であったものの、明治維新の際に零落し、住み込みのお手伝いとなった。真逆の人生を歩む二人は、一見、赤シャツの方が好印象を持たれることが多いように感じる。私自身も、東京大学卒業と聞くと、頭が良くて、それだけでも何だか凄いイメージを持つ。誰しもそう感じるであろう。

では、赤シャツが得た多くの知識の使い方は、正しいと受け取ることができるだろうか。相手を見下す手段として、自らの知識をひけらかすことは、正しい知識の活かし方ではないと私は思う。極論ではあるが、知識というのは、生活を豊かにする一部で、多方面な考え方を持つ発端となるのではないか。

清は、赤シャツと違い、大学へ進学してはいない。けれども決して坊っちゃんのことを馬鹿にすることはせず、「真っ直でよいご気性だ」と素直な坊っちゃんの考え方や物事の捉え方を褒めている。

このことが、赤シャツと清の大きな違いの一つであり、坊っちゃんが「清はこんな時に決して笑った事はない。」と思った理由でもあると思った。学問も必要であるが、学問ができるということが全てではなく、生きていく中で人間性は、人

と関わりを持つ上で重要だと作品から感じた。ただ、私は人間性はもちろんだが、学問も大切であると思う。さまざまなことを学ぶことによって知識の幅が広がり、興味のあるものを見つけられるからだ。私は、今、中学校で学んでいることは知識の幅を広げる為の一つであると思う。興味のあるものから、自分のなりたい人物像を見つけることにも繋がる。だからこそ私は、赤シャツのように多くの知識を得て、そしてその知識を人としての深さを得る為や人の為になることに活かす人になりたい。さらに、清のような温かな人間性を持ちたいと心から感じた。

学問と人間性を同じものさしで測るということは少し違うかもしれないが、双方の重要性を深く理解し、本来人が持つべき、考え方、優しさ、思いやりなどのさまざまな「こころ」を持とうと感じることができた。

令和3年度新宿区夏目漱石コンクール
読書感想文　中学生の部

佳作

一人になる

日本女子大学附属中学校　2年
井上　杏

作品名『坊っちゃん』
選んだ一行
何だかたいへん小さく見えた

何だかたいへん小さく見えた

この一文は、列車がプラットフォームから離れていくため清と自分の距離が離れ遠くの清が小さく見える様子の他にも清を一人にして大丈夫か、と心配している主人公の心情も表れている。しかし私はそれに加えて、いつも自分を肯定してくれていた清のいないこれからの生活に主人公が抱えていた不安も表れていると思った。主人公は周りの人とは違う潔さや真っ直ぐな感情を持っていて、思考が周りから理解されにくく嫌われやすかったが、そんな彼を肯定して褒めてくれる

唯一の存在である清という存在は彼にとって本当に支えになっていたのだと思う。

両親からも兄からも理解されず、世間から嫌われるような性格で自分の味方の立場にいる人はほぼいない、という状況を私は当然経験したことはなく、その辛さや苦しさは私には分からないが、そんな自分を支えてくれて褒めてくれる人が、どんな人であってもいるなら、生きる希望が見える。感覚としては暗闇の中を歩いている時にずっと一緒に隣で歩いてくれる人がいる、という状況が想像しやすいだろう。

そのような状況であれば私は感じた経験がある。人はこの世界に何人もいて、それぞれ意志をもつ生き物なので衝突したり、傷つけ合う。しかし私は人を傷つけたくない、周りからの印象を悪くしたくない、という思いがあり、心の中に強い意志があっても口に出さないようにしている。しかし、やはり咄嗟に口に出てしまって後から心配になったり、口に出せない意志が溜まりに溜まって精神的に辛くなって、どうしても一人になりたくなり一人で部屋に閉じこもって考えることがある。その時間は特に何か考えている、という訳ではないが、いつも勝手にもしこの世界に自分しかいなかったらと考えている。一人で生きていけば誰かを傷つけたり、悪く思われることもなく、自由に生きていけるかもしれない。しかし世界のどこにも自分以外誰もいない。屋外で助けを呼んで叫んでも誰も来ない。自分のことを嫌う人もいなければ自分を支えてくれる人もいない。そんな世界と現実の世界はどちらがいいだろうか。

私はいつもそう考えて現実の世界に生きていることの有難さを感じていつも自分を取り戻す。現実の世界が辛く苦しいと感じていたとしても自分を支えてくれる人間という生き物は周りにたくさんいて、自分も誰かを支えている人間である、ということを忘れないで過ごしていきたい。また、将来何らかの理由で大切な人と離れることになった時に、一人でいても一人じゃない、ということを心に留めて、強く大きく生きようと思う。

令和3年度新宿区夏目漱石コンクール
読書感想文　高校生の部

最優秀賞

まことの自由の追求

フェリス女学院高等学校　2年
水上　京香

作品名『私の個人主義』
選んだ一行
第一に自己の個性の発展を仕遂げようと思うならば、
同時に他人の個性も尊重しなければならないという事。

「一人ひとりの個性を尊重しよう」

幼い頃に幾度となく聞いたこの言葉は、成長するにつれて、いつの間にか「出る杭は打たれる」という言葉に変わった。私は気付かぬうちに、他者に倣い「普通」から外れないことに異常なほどまでに固執するようになったと思う。他の人と違う行動や発言をして、変わった人だと思われるのも怖かったし、自分勝手だと思われるのも嫌だったからだ。自分と違う意見が出たとしても「私もそう思ってた」と思ってもいないことを言って、あたかも元からそう思っていたかのような口ぶりをしたり、意見がまとまってきた頃にまた別の意見を出す人がいたりすれば、その人のことを自分勝手な人だと思った。そこまでして自分の意見を出したいのか、と。最後まで自分の意見を主張する行動を、個性だとは思わなかったし、そのような人を見る度、自分本位だと思った。そして、「自分本位」という言葉はマイナスな言葉で、自分のことしか考えていない人を指す言葉であると思っていた。

しかし、漱石の「自己が主で、他は賓である」「自分がそれだけの個性を尊重し得るように、社会から許されるならば、他人に対してもその個性を認めて、彼らの傾向を尊重するのが理の当然」という言葉にハッとさせられたような気がした。自分本位とは、自分の自我を一番に尊重すると共に、だからといって他人の自我を妨害することなく、その人のことも同じように受容することなのだと気付かされた。つまり、私が自分本位だと思っていた人は、相手の意見を聞いた上で自分の意見を言っているわけで、漱石が言うところの「自分本位」な「個性」を持つ人だったのだ。

私の学校の教育方針には、「まことの自由の追求」というものがある。だからこそ私の学校ではよく、何かが起こる度に「まことの自由」とは何か、何をしても制限されないことが自由だろう、という声があがる。しかし、漱石が言うように、

義務心を持っていない自由は、本当の自由ではない。義務の観念を離れない程度に自由を愛すことこそが、「まことの自由の追求」なのではないだろうか。ただただ、なんの制約もなしに自らだけの自由を求めるのは、自由などではなく、自分勝手なだけである。同じように、自分勝手と自分本位は、本質から全くの別物であるのだ。

漱石が生きた明治時代から発展した「個人」や「自由」という概念は、時が経つにつれ、誤認する人も増えた。「個人主義」を大義名分にして、自由気ままに自分の主張を伝え、他の意見には聞く耳も持たない人も散見される。もしくは、私のように、ただ周りに流され、受け身で暮らしている、「個性」のない、「自由」を手に入れていない人も多いかもしれない。そんな現代だからこそ、漱石の本を読み返し、先人の言葉に耳を傾けることで、自分の個性を発展させるために、自分を主として意見を持つものの、一方で賓である他人の個性も尊重し、真の自由を手にしたい。

審査講評

選んだ一行からの主張や考察がよくまとめられている。学校の教育方針に結びつけ理解を深めている点も良い。

令和3年度新宿区夏目漱石コンクール
読書感想文　高校生の部

朝日新聞社賞

鄭寧に伸した

東京都立調布北高等学校　2年
長谷川　桜音

作品名『こころ』
選んだ一行
父はそれを鄭寧に伸した。「こんなものは巻いたなり手に持って来るものだ。」

私が選んだ一文は『父はそれを鄭寧（ていねい）に伸した。「こんなものは巻いたなり手に持って来るものだ。』』です。

その一文を選択した理由は主に二つあり、一つはその文だけで父の「私」に対する深い愛情と、当たり前の偉大さに気付く大切さを読み取ることができるためで、もう一つはその文、ひいてはその部分がこの物語の「陽である日常」を示す、ふと息つける場面という役割を果たしていると感じたためです。

選択理由の一つ、父からの愛情について、私はこの文を目にしたとき瞬間的に、少し震えた「父」の手が、照れたように、恥ずかしそうに、少し申し訳なさそうに父の顔色を伺いながら差し出された卒業証書をしっかりと受け取り、口では憎まれ口を叩くように説教を述べているが、表情と皺を伸ばす仕草は慈愛に満ちている―という情景が浮かびました。と同時にその場面には父子間の特別な温かみがあると思い、家族という存在ならではの深い愛を感じ、羨ましくなりました。

またこの場面で私が選択した一文の前に「それほどにもないものを珍しそうに嬉しがる父」という表現があるように、人は当たり前を当たり前として認識してしまうと、なかなかその当たり前が持つありがたみにも、幸せにも、可能性にも気付くことができません。しかしだからこそ、「父」の言葉によって、その当たり前は取り方や受け取る人によっては何物にも代えがたいものになり得るのだということに改めて気付かされました。

選択理由のもう一つの、この場面が「陽である日常」を示すということについて、私は本作について一貫して、多少のセンチメンタルが交じる晩夏の夕暮れのような静けさを感じていたのですが、この場面においては花咲き誇る春の昼間のような明るさと暖かさを感じました。硬すぎず緩すぎない程度に張られた糸のような緊張感が続く物語展開の中で「父」と「私」の会話は私たち読者に束の間の休息を与え、人間としての温もりを感じさせ、本作における「陽」の立ち位置を担い、そしてその少し前に描かれる田舎風景によって日本人の心に訴える「日常」を表現していると感じました。そしてこの場面があることにより、Kの死や「先生」の持つ不思議な静けさとのコントラストは生み出されていると思いました。さらに「鄭寧に伸した」ということをあえてしっかりと言葉にして表現することで、多少遠回りにはなりますが、その場面をよりクリアに分かりやすく読者に届けられ、少し頭の動きを休む時間が持て、よりその次から物語にのめり込みやすくなる、そんな効果があるように感じました。

以上二つが私がこの一文を選択した理由です。この文を通して改めて、当たり前の尊さを意識して生きたいと感じました。

審査講評

印象的な表現が数多い「こころ」の中でも地味な一言を選んだ理由が、瑞々しい比喩で繊細に綴られている。卓越した表現力に目をみはった。筆者の頭の中では情景が鮮やかに浮かんでいるのだろう。

令和3年度新宿区夏目漱石コンクール
読書感想文　高校生の部

紀伊國屋書店賞

不透明な世界の光

聖心女子学院高等科　2年
加藤　優

作品名『硝子戸の中』
選んだ一行
「私は悪い人を信じたくない。それからまた善い人を少しでも傷つけたくない。」

人間関係で一度も失敗したことがないという人はおそらくいないであろう。どの人もみなそれぞれ、人との関わりの中で衝突したり苦しんだりした経験を持っている。しかし、そのような経験を通じても、やはり相手を判断することは相も変わらず難しく失敗を繰り返してしまう。そしてかくいう私も今、人間関係で悩んでいる最中の一人である。しかしそんな私ではあるが、最近、自分の経験を通じて気づいたことがある。それは、影があるからこそ光が際立つということだ。

私は今まで何度もこの文でいう「悪い人」に悲しい思いをさせられてきた。人を思いやる気持ちがない人に傷つけられ、周りにいる人達を信用できなくなりそうになったこともある。けれども、そんな人と関わった経験があるからこそ分かったことも沢山あった。温かい言葉は人を強くする力があるということ、自分という存在には価値があること、そしてなにより、善い人に出会ったときの喜びや尊さを感じられるのは、そうでない人との辛い経験があったからだと知ることができた。

私はこの善い人達という「光」を大切にしたい。そして悪い人を信じることでその光に影を落としたくない。だからこそ、私は「悪い人を信じたくない。それからまた善い人を少しでも傷つけたくない。」というこの文章に強く共感したのである。

この本の中で漱石は、他人に対する自分の態度について深く思案している。人を判断することの難しさ、そしてその苦悩について語っている。最終的に彼は、「もしそれが生涯続くとするならば、人間とはどんなに不幸なものだろう。」と締めくくる。

確かに、人間とは不幸な生き物かもしれない。すべてを透明にして単純に生きることが難しいゆえに、多くの苦労を引き受ける。しかし、皆が明確な人間になってしまった世界に

私は住みたいとは思わない。何故なら、私は人間の不透明な性質をとても尊いものと思うからだ。互いに分かりあおうとする尊さや善い人という光の美しさは、今の世界でなければ気付くことはなかっただろう。

そのような不透明な世の中で、私たちは何度も他人と衝突する。判断を間違えて傷つくこともある。けれども、その経験は決して無駄なことではないと思う。前述したように、影があるからこそ光が際立つと分かったのは多くの出会いがあったからである。それを分かっているからこそ悪い人を信じず、善い人を傷つけない生き方をしたいと私はひしひしと感じるのだ。

審査講評

「私は今まで何度もこの文でいう「悪い人」に悲しい思いをさせられてきた」という言葉にどきりとさせられ、その思いを反転させるように感想文が組み立てられていて感心させられた。

令和3年度新宿区夏目漱石コンクール
読書感想文　高校生の部

新潮社賞

ヘクトーへの愛

光塩女子学院高等科　3年
鮫島　世玲菜

作品名『硝子戸の中』
選んだ一行
然し間もなく二つとも同じ色に古びて、同じく人の眼に付かなくなるだろう。

生きている者はみな死を背負っている。漱石も例外ではない。自身の体は常に不安定で、しかし元気になると不思議と多くの死を目の当たりにしてきた。運命は漱石に、命は有限であるという冷厳な事実を示し続けた。

漱石の中で忘れ難い別れの一つはヘクトーとの別れだろう。ヘクトーは小さい時に漱石の知り合いの家からきた犬だ。不安で眠れないヘクトーに寄り添い、優しく接する漱石の愛情に触れ、心を開くようになった。軽快な明るいリズムで綴

られる無邪気なヘクトーの描写に、私の心も弾んだ。その瞬間、私もヘクトーと漱石がいる空間で、幸せに包まれていた。それほど、文章には愛情が溢れていた。

ところが、ヘクトーは孤独な死をとげた。ヘクトーに対する複雑な感情が漱石を翻弄する。寂しかったであろうヘクトーを自分の傍にずっと居させたい。しかし、息をしないヘクトーを目の前にする事で、ヘクトーの死が現実に起きた事だと突きつけられる。漱石はアンビバレントな感情の狭間に立っていたのだ。最後の別れに、万感を込めた一句を記した墓標をヘクトーの眠る土の上に立てた。ヘクトーとの思い出を記した最後に漱石が選んだ言葉はこの一文だった。ここでは、その墓標も時が経てばやがて色褪せるという事実を述べている。淡々と、世の摂理を読者に再認識させる一文は、実は寂しさと切なさに溢れ、後に続く余韻を強調し、あまり感情を表にすることがない漱石の悲痛な叫びが感じられた。

墓標の物理的な風化は「時」の影響を受けて起こる。時が経つにつれ、墓標が古びてヘクトーへの想いに溢れた一句が薄れて見えづらくなるように、人々の中に残る記憶も薄れていくという現象は免れられない定めだ。加えて、ヘクトーを失ったという、あまりに大きい喪失感に、心の傷を癒すべく時の力の影響に縋りたいという願望が漱石の心を支配する。無表情な日常に温かい生の実感を齎してくれたヘクトーに対する愛は、膨大なエネルギーを使って時の力に抗ってでも、ヘクトーをこの本の中で生かし続けたいという願いとなり、それが強い意志となって、漱石を鼓舞した。漱石は、たとえ他の人の記憶から消えていくとしても、自分だけはヘクトーの思い出を忘れまい、とする決意をこの一文に込めたのではないだろうか。人間は、愛する存在を亡くした後は悲しみにくれることしかできない。だが、自らが大病を患い、常に死と隣り合わせの時間を多く過ごし、命の重さを知る漱石だからこそ、ヘクトーの命を少しでも長く心に留めておくべく、漱石の渾身の力を筆に込め、ヘクトーを本の中に留めておく努力をしようとしていたのだ。命の儚さを痛感する漱石が、圧倒的な時の力を前に、ヘクトーと過ごした時間の記憶を懸命に残そうとする、この上ない愛情が込められたこの一文は、「硝子戸の中」という狭い世界の中から世の中に示された、漱石の「人間らしい愛情の深さと大きさ」だったのではないだろうか。

審査講評

一見冷淡にも見える表現から、漱石がヘクトーに寄せた愛情、その愛犬を喪くした作家の複雑な心情を、想像力豊かに読み取っている。

東京理科大学賞

つながれる「こころ」

東京都立調布北高等学校　2年
礒　麻李

作品名『こころ』
選んだ一行
自由と独立と己れに充ちた現代に生まれた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならない

「かつてはその人の前に跪いたという記憶が、今度はその人との頭の上に足を載せさせようとするのです。中略　自由と独立と己れに充ちた現代に生まれた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう。」この先生の「私を信じてはいけない。」という発言に続けられたセリフを私は選びました。このセリフは今を生きる我々にこそ響く言葉だと思ったからです。

まず前半の「かつては…」についてです。これは現代だけではなくいつの日もそうだと思います。作中で先生が尊敬し、跪いたKを出し抜きお嬢さんに思いを伝えたように、畏敬の念を持っているからこそ相手にもそう思ってもらいたい、そしてその人よりも上だという認識をもつことで優越感を得たいまたは自分を肯定したいと思うことはあると思います。私もそのおぼえがあります。この作品では先生とその親友のKという対等な関係の間で起きましたが、友人関係以外でもそれは多く起こっていると思います。先生と生徒、親と子、最近ではアイドルなどの有名人とそのファンや視聴者の間。最初はただその人が好きで応援していただけなのにいつの間にか自分がその人の特別になりたいと思い、それができないとなってその人を貶めようとしてしまう厄介な感情だと思いました。

次に後半の部分です。自由を一種の正義として扱ってきた、良くも悪くもほとんどのことを自分一人で選択できる現代の高校生の私に強く残りました。今は多様性を受け入れようという動きが強く、多種多様な生き方が少なくとも表面上は認められてきています。生きる場所や職業、恋愛。そのほとんどが自分の扱える範囲にあります。つまり自分の選択によってきまります。その際他人から助言などはうけますが決めて動くのは自分であり、その責任も自分にあります。他人と分かち合うなんてことは不可能でしょう。私は今高校二年生で

進路について考えざるを得ない年齢になっています。周りの友達や先生に相談することはありますが最後は自分です。誰かが勝手にスイッチを押してくれるわけでもないのです。それが時々すごくさみしく思います。周りに一人として誰もいないような感覚がするのです。ＳＮＳが普及し一人ひとりの時間の使い方が昔よりバラバラになりました。それによって共通の話題を持つことが難しくなったのではないでしょうか。これもまたさみしさを招く原因かもしれません。

けれどそれが悪いことではないと思いますし、漱石もそう伝えたかったのではないでしょうか。さみしさを抱えながら、それでも生きていってほしいと伝えたかったのだと思います。先生が「私」に遺書をたくしたように、漱石は私達に「こころ」をたくしたのだと私には思えました。

審査講評

明治以来の自由な社会の裏に、全て自分で判断していかなければならないということはとても孤独なことだという漱石の主張を読みとり、現代に生きる自分に当てはめて漱石の主張を深く掘り下げている。

令和3年度新宿区夏目漱石コンクール
読書感想文　高校生の部

二松学舎大学賞

匂い立つ愛と美

日本女子大学附属高等学校　1年
福永　真緒

作品名『夢十夜』
選んだ一行
真白な百合が鼻の先で骨に徹(こた)えるほど匂った。

幻想的な美しい時間と空間が広がる「夢十夜」の第一夜。私のお気に入りは「真白な百合が鼻の先で骨に徹(こた)えるほど匂った。」の一行である。

百年待っていてと最後の願いを伝えて亡くなった女。長い間待った男の前に咲いた一輪の白い百合。女は百合に生まれ変わって男のもとに帰ってきたのだろう。百合とは「百」年先に「合」うという意味だったのだ。

この物語には二人の関係性が描かれていない。私は二人の

関係を想像してみた。女の瞳に男の顔が映るとの描写があった。親しくなければ、そんな至近距離で会話はしない。百年待つ約束もしないだろう。待たせることは心苦しい。待たせる勇気も待つ勇気も深い関係がなければもてない。女と男は愛し合っている。夫婦なのか、恋人なのか、家族なのかはわからない。いずれであってもこの二人が深く思い合っていることは間違いない。

女は百年たって姿も形も変わった。しかし、男は真っ白な百合の花の「骨に徹えるほど」の匂いにより女の存在を強く感じた。百年のときを超えて再会できた喜びである。私は愛の力がこの物語のテーマだと思う。時空を超え、女と男の愛は永遠となった。

この愛の偉大な強さを漱石は「好き」「愛している」といった直接的な愛情表現なしで描いている。匂いだけでも二人の愛の深さを想像できる。

この物語のもう一つのテーマは「美」だと思う。五感を揺さぶる幻想的で美しい表現でつづられている「夢十夜」。数々の美しいもののなかでも、私はやはり百合に心を奪われた。女は死んで百合になった。百合は女の死の象徴である。百合として甦った女の化身である。死によって美もまた永遠になる。

女が百合となって甦ることができたのは男が百年待っていたからかもしれない。そう思うと愛と美は一体的なもののように思えてきた。そして、死によって永遠となる。

この物語を読んでいるとき、私のなかに音楽が流れてきた。ショパンの「幻想即興曲」である。ピアノを習っている私の好きな曲の一つだ。この曲は力強い重厚感と、触れたら消えてしまいそうな儚ない優美さとを兼ね備えている。何より幻想的で美しい。この物語を私が映像化するなら「幻想即興曲」を音楽に使いたい。

漱石の描いた夢の世界に私は入り込んだ。愛と美が一体で死によって永遠になるロマンチックな物語に、高揚感とときめきを感じた。この先、百合の匂いを嗅いだとき、「幻想即興曲」を弾いたときや聴いたとき、私は「夢十夜」の幻想的な世界にひたることだろう。

審査講評

文章の展開がロマンチックであり、リズムがある。生まれ変わった姿が何故百合なのかを紐解き、比喩的な表現から「解釈」と「美」を導き出している。

令和3年度新宿区夏目漱石コンクール
読書感想文　高校生の部

佳作

先生の幸福

三輪田学園高等学校　2年
酒井　春奈

作品名『こころ』
選んだ一行
妻が己の過去に対して持つ記憶を、なるべく純白に保存しておいてやりたいのが私の唯一の希望なのです

この文は先生が「私」へ向けて送った手紙の最後の部分である。先生はこの手紙を「私」に残して自らあの世へ旅立ってしまったのだ。何も知らない先生の妻は帰って初めてこの事実を知らされることになるのだ。これはなんと残酷なことだろう。最低だ。もしもここまでの経緯を知らなければ、私は先生に対してこう思っていたことだろう。

先生はいつもどこか哀愁を漂わせている。しかしどんなに妻に問い詰められようと泣かれようと先生は頑なに自分の過去を語らない。そのくせ沈んだ気持ちを隠そうともしないのだ。きっと内面では誰かにこの生きづらさをわかってほしい、助けてほしいと思っているはずであるのに誰にも何も言わないのだ。この作品を読んでいる途中、私は先生に対して憤りを感じた。なぜ誰かに助けを求めないのだろうかと。なぜ妻が泣いて懇願しているのに話してやらないのかと。しかし真実はそう単純なものではなかった。

「若く美しい人に恐ろしいものを見せると、折角の美しさが、そのために破壊されてしまいそうで私は怖かったのです。」これはKが死んだ直後の先生の心情である。先生は妻を心から愛していた。そして美しいと思っていた。先生はそんな妻の美しさを自分の過去で破壊したくなかったのである。しかし私にはどうしてもこれが先生のエゴイズムに思えてならないのだ。妻は自分の愛する夫を理解したいという気持ちを夫のエゴイズムによって拒否され続けていたのである。このことがどんなに彼女を傷付けたのかは想像に難くない。

私は先生のことが嫌いである。なぜなら先生は無責任だからである。妻の気持ちを拒否し続けた上に一人で黙って死んでしまったのだ。先生は一人残された妻の事も、この秘密を一人で背負わされることになる「私」の事も何も考えていなかったのである。

しかしこんな私にも先生の気持ちが少しはわかるのだ。先生は誰かに対する悪意など少しも持っていなかったのである。よく言えば周りの愛に鈍感であっただけ、悪く言えば過去に耽溺しすぎていただけなのである。きっと妻に自分の過去について打ち明けていれば妻は一緒に過去を背負おうとしてくれたのではないか。そして先生なりに過去と向き合う事ができたのではないか。私にはそう思えてならないのである。結局のところ、先生も先生に共感できてしまう私も臆病な人間なのだ。

漱石はこの作品を通して私たちに何を伝えたかったのだろうか。それはきっと誰かの幸福の犠牲の上に成り立った幸福は、誰も幸せにすることはできないという戒めであると思う。しかし私はまだこの作品を完全に理解した気になってはいけないとも思うのだ。先生にとっての本当の幸福とはなんであったのか。きっとその答えは先生自身にしか分からないのであろう。それ故に先生の遺したこの一文が私のこころに重くのしかかっているのである。

令和3年度新宿区夏目漱石コンクール
読書感想文　高校生の部

佳作

上等になるための学問

渋谷教育学園渋谷高等学校　2年
赤塚　莉音

作品名『こころ』
選んだ一行
学問をさせると人間がとかく理屈っぽくなって不可ない

「学問をさせると人間がとかく理屈っぽくなって不可ない」―夏目漱石著『こころ』で、大学を卒業したばかりの「私」が父に言われた言葉。物語の本筋とは関係ない場面での短い一言だが、日々勉学に励む私の心に蟠りを残した。「理屈」とは物事の筋道を意味するが、なぜ父は「不可ない」と言ったのか。「私」は、田舎者の親を馬鹿にしていた。大学卒業後大病に罹った父の元へ帰った「私」は「卒業できて結構だ」と言った父に「卒業する人は毎年何百人といるので、大したことじゃない」と理屈を並べたが、「おれが生きているうち

に息子が卒業したことがおれにとって結構なのだ」と言われ、恐縮している。父はこの時、自分の正しさを信じて疑わない「私」への失望と小っ恥ずかしさで口籠もった。

私も、中学生の時父母を馬鹿にしていた。父母は両方田舎で育ち、時代もあって私よりも程度が低い教育を受けていた。私は親よりも頭がいいと言う自覚があり、口が立つことから、親によく口で反抗していた。すると親は、私の発言内容よりも私の態度に対し「親に感謝の気持ちがあるならば、偉そうに態度は自ずと出ない」と説教したのだ。それまで私は、家事の手伝いもして、言葉などで、日々感謝を表明しているつもりだったが、表層でなく深層部分で親に感謝しているならば、いくら言いたいことがあろうと親に傲慢な態度を取ると言う前提がおかしいのだと言うことに気づいた時何も言えなくなってしまった。私は自分だけの中の正しい理屈に固執し、親を敬い意見を尊重するという大事なことを忘れていた。田舎に住む父母と無知識な人間を軽蔑している「私」と同じように。

このような私や「私」の傲慢な考えこそ、勉学を重ねるにつれて、自分より無知識な人間を心の中で卑下するようになっていくという、勉学における弊害の一つだろう。人間は多くのことを知ると、自分が全能だと信じ込んで自分勝手になっていく。相手の立場や世間体、人としての思いやりなど、他に大事なことすることがあっても、理屈を第一にする人間はそれに気づかない。理屈に囚われ自己中心的になり、結果的に狭い思考になっては不可ない、というのが父の思いなのだ。

「学問をして人間が上等にならぬくらいなら、初めから無学でいる方がよし」―28歳の漱石は『愚見数則』の中に、こう記している。学問によって本当に磨き上げるべきなのは、知の力であり人間性そのものであり、それが出来上がらないようなら、学問などする意味がないと、漱石は指摘している。「私」は父の一句のうちに、父が平生から自分に対して持っている不平を感じ取った。父の言葉がそれだけ深く描かれているのは、まさに漱石が持つ勉学に対する信念だったからではないだろうか。

佳作

本当の愛とは何か

東京都立調布北高等学校　2年
伊熊　優花

作品名『こころ』
選んだ一行
本当の愛は宗教心とそう違ったものでないという事を
固く信じているのです

「本当の愛は宗教心とそう違ったものでないという事を固く信じているのです。」

これは、先生の遺書の中の一文である。私はこの文を読んだときに、妙に納得すると共に、違和感を覚えた。その違和感というのは、「本当の愛は宗教心とそう違ったものでないのです。」と断言しても良いと思うのに、どうして「固く信じているのです。」という表現にしたのかということだ。

先生は、お嬢さんに対して、「私はその人に対して、ほとんど信仰に近い愛をもっていたのです。」と述べている。「信仰」という言葉の意味を調べてみると、「ある神聖なものをかたく信じる心、自分のよりどころとすること。」だということがわかった。これをお嬢さんに対して抱いているということは、お嬢さんをかたく信じ、自分のよりどころにしていたということだ。そして、先生曰くそれが本当の愛だと言うのだ。私はそれに納得した。相手のことをいくら好きだとしても、信じていなければ、お互いを認めることができない。そして、その信頼関係がなければ、自分のよりどころになんてできないだろう。それを「信仰」という言葉で表すなら、愛は宗教心と違わない。

では、先生はどうして愛は宗教心と違ったものではないと断言しなかったのだろうか。私は、先生にとって「お嬢さん」であったころであれば、断言していたと思う。しかし、「妻」へ変わっている遺書を書いた当時であるからこそ、このような表現になったのだと考えた。先生と妻、その間には本当の愛に必要な「信頼」がなかったのではないか。先生は親友を裏切り、その上で妻を自分のものにした。そして先生はその行為が親友を自殺へ追い込んだと思っている。その過去のせいで先生は妻に隠し事をしているような形になり、妻も何か隠されていて、信頼されていないのではないかと思ってしまう。そうして二人の信頼関係は失われてしまったのではない

だろうか。だから先生は断言することができなかったのだと考えた。

私はこの一文から、とても大切な人生の教訓を授かったように感じた。いつか私にも宗教心を抱くような相手ができたとき、この一文をもう一度思い出すようにしたい。相手のことをかたく信じ、自分のよりどころにする。そして何よりも、お互いを厚く信頼する。それこそが、先生の言う「宗教心」であり、「本当の愛」へとつながるのだ。この言葉を大切にして、本当の愛を見つけて行きたい。

令和3年度新宿区夏目漱石コンクール
読書感想文　高校生の部

佳作

信頼関係を築く大切さ

鎌倉女子大学高等部　2年
飯田　光菜

作品名『夢十夜』
選んだ一行
「百年、私の墓の傍に坐って待っていてください。きっと逢いに来ますから」自分はただ待っていると答えた

眠れない。疑問が頭の中でぐるぐると回り続けている。果たして百年は経ったのか。百年待っていられたというのか。自分は女と再会出来たのか。どう解釈したらいいのかわからず、目が冴える。これは、夢十夜を第一話から読み始めた夜のことである。

夢十夜というタイトルと短編集ということで寝る前に読むのにちょうどいいのではないかと手にとったが、これがとんでもない判断だった。夢の中の事とは言え、非現実的である

独創的な世界観を理解するのに、心地よい眠りとはほど遠い、疑問の渦中に引き込まれることとなった。

そもそも百年待っていてというお願いも無謀だと思うが、待っていると即答した自分の回答にも驚いた。しかし、これは夢だから何でもありだという事ではなく、二人の間にある信頼の比喩ではないだろうかと思うようになった。石の上にも三年というが、いくら夢でも実際に自分は苔の上に百年もいなかったのではないだろうか。

この話を読んで、私はマディソン郡の橋を思い出した。普通の主婦だったフランチェスカが偶然出会ったロバートと過ごしたのは、たったの四日間だったが、その精神的な結びつきは強く、遺灰をロバートと一緒のローズマンブリッジに撒いてもらう。その四日間以降二人は会うことも無く、フランチェスカは夫と二人の子のために生涯を費やした。しかし、普通に生活しながらも、お互いの命が尽きるまで、常に精神的に強い結びつきがあったに違いない。

一方、自分が女を見つめる表現には、赤い唇、輪郭の柔らかな瓜実顔、長い睫毛に包まれた大きな潤いのある眼等、とても愛情が感じられる。精神的な深い結びつきがあったのだろう。現実には、自分は普通に衣食住の暮らしをしていたのかもしれない。しかし、自分の精神は片時も女の墓の傍を離れなかったのではないだろうか。その場所でただ赤い日を数えて、百合となった女がお迎えにきてくれる日まで年月を過ごしていたのではないだろうか。

会わなくてもお互いを信じ思い合う心。これはある意味、ネット社会に生きる今の私達とは正反対である。コロナ禍で友人達と会えないのは寂しいが、チャットでいつでも話すことは出来る。しかし、便利なようなこのシステムのせいで、ちょっとした解釈の違いや過剰な情報、時間の拘束等行き違いが生じ、トラブルは日常的に発生する。もしも目先の情報にとらわれず、自分が知っている相手の本質を信じることが出来たならば、現在起きているトラブルの多くは回避されるかもしれない。

精神的な結びつき。強い絆があれば、目先の誤報に迷うことなく相手を信じ続けることが出来る。私も便利なネット社会に流されることなく人の本質を見抜き、信頼関係を築いていきたいと強く思った。

佳作

信じる

長野清泉女学院高等学校　2年
宮本　愛紗

作品名『夢十夜』
選んだ一行
女は静かな調子を一段張り上げて、「百年待っていて下さい」と思い切った声で云った。

幻想的で少し不気味な雰囲気を持つ漱石の短編集「夢十夜」。第一夜に登場するこの一文は、死ぬ間際の女が主人公である「自分」に「逢いにいくから待っていて」というお願いをするときの言葉である。この一文の前にも女は二度、同じお願いをしている。一回目は死んだら埋めてほしいというお願いに重ねて『そうして墓の傍に待っていて下さい。』と。二回目は少し試すように『あなた、待っていられますか』と。そして一段調子を張り上げて『百年待っていて下さい』と三回目。私がこの一文を選んだのは、女が待っていてと繰り返すこのシーンに緊迫感と切なさを覚えたからだ。

この女は不安であったのだろう。死ぬことよりも、死んだ後独りになることを恐れていたのだろう。ここからは私の想像であるが、二回目少し「自分」を試すように問いを投げかけた時、女は首肯いただけの「自分」のことが信じきれずにいたのだと思う。

「ほんとうに逢いにくるとは思ってないのでしょう?ほんとうに待つつもりはないのでしょう?」

そんな想いからでた一言こそが、この『百年待っていて下さい』であったのではないだろうか。

私は今十六年目の人生を生きている。日々たくさんの経験を重ね、そこから学びを得ることもある。その中で私は人に期待をしすぎて失望した経験が多々あった。もう失望したくないと思った私は人に期待をするのをやめることにした。少し気が楽になったはいいものの、やがてどことない寂しさや孤独感を感じるようになった。友達や家族に親切にしてもらっても、これにはいつか終わりがあるのではないかと不安になってしまう。もしかしたらこの話に出てくる女と私には、少し似たところがあるかもしれない。

しかし女は最期、不安を抱えながらも「自分」を信じようとした。「自分」も女のことを信じ続けて待っていた。私はずっ

と〝人に期待する〟ことと〝人を信じる〟ことの意味合いはなんとなく同じであると思っていた。だがこの話を読んで、その意識が変わった。〝人に期待をする〟というのは、自分が想像していた期待通りの結果が来ることを望んでいるだけであり、人より結果を重要視してしまう。だからガッカリしやすい。それに対し〝人を信じる〟ということは、期待通りの結果など求めず、その人自身が良い判断をしてくれることを願うこと。信じるというのは、愛に近い。私はそう思った。

この気づきは私にとって大きなものであった。もし私が心の底から信じられる人ができたら、その存在は私の人生を豊かにしてくれるだろう。そして私は人のあたたかさを素直に受けとめられるようになるだろう。また私も誰かに信じてもらえる人間になって、誰かの人生を豊かにしたいと強く思った。百年分、誰かに信じてもらえるような人間に。

令和3年度新宿区夏目漱石コンクール
読書感想文　高校生の部

佳作

不可思議なこころ

同志社国際高等学校　2年
藤本　夏翠

作品名『こころ』
選んだ一行
人間のどうする事も出来ない持って生れた軽薄を、
はかないものに観じた。

初めてこの一行についてじっくり考えたとき、前の文脈から「私」がはかないと考えるのは、死に対してどうすることも出来ない人間の軽薄だと解釈した。迫り来る絶対的な父の死を前にして、真面目であるはずの「私」も「気の変りやすい軽薄もの」となった。私たちは、絶対的な死に抗うことはできない。そのうえ、明日が来ることを誰もが信じて疑わない。まさに私たちは、私たちの心は軽薄である。

しかし、私たちの心は絶対的な死に対してのみ軽薄にな

るのではないだろう。私は「私」ではなくて「先生」の方が軽薄ものに思われて仕方がない。叔父に欺かれ他人を信用しないと誓うも、御嬢さんのことだけは絶対に信じている。また、Kを助けるために家へ連れてきたのに、いつしか嫉妬心を抱くようになり、果てには自殺にまで追いやる。そんな先生の矛盾した行為、その基盤をなす先生の心こそ、軽薄だ。金に目が眩んだ叔父にしろ、御嬢さんを専有したい欲にかられた先生にしろ、人間のエゴイズムが顕著に表れている。善人と悪人なんて、実は表裏一体で、二つの間に大差はないのだろう。

もちろん私も、そんな人間の一人として例外なく軽薄な心を持っているのだろう。現に、年齢を重ねていくごとに私の心も変化している。サンタクロースを信じた純粋で尊い心は既に消え果て、親への反抗心も薄れた。今、抱えている悩みも、いつかは消えてなくなるのだろう。これから大人になるにつれて起こるべき心の変化を思うと、なんだか寂しい。欲に盲目になるより前にも、心は絶えず移り変わっている。「私」が考えるように、心は確かにはかないものだ。

『こころ』の広告文には、こうある。

「自己の心を捕へんと欲する人々に、人間の心を捕へ得たる此作物を奨む。」

何度読んでも人間の心を捉えることのできなかった私は、この広告文に疑問を感じていた。しかし、そもそも心を捉えようとすることが間違いだったのではないか。心は移り変わりゆく不確かなものだから、むしろ捉えることのできないものであると、漱石は教え諭したのではないだろうか。そして、そんな不可思議な心と向き合った作品が『こころ』ではないだろうか。

今、こうして考えていることも、何年か経てば忘れているだろう。なぜなら私たちは軽薄で、心は常ならぬものだからだ。だからと言って、誰も信じられないと悲観すべきではないだろう。不確かで、不可思議な心は、人間の魅力のひとつかもしれない。そんな不確かさを自覚しつつ、認め合うことで、私たちは互いに信頼し合うことができるのではないだろうか。

佳作

『野分』

愛媛県立松山西中等教育学校　4年
安達　乙輝

作品名『野分』
選んだ一行
「どうしたら学問で金がとれるだろうと云う質問ほど馬鹿気た事はない。学問は学者になるものである。金になるものではない。」

「どうしたら学問で金がとれるだろうと云う質問ほど馬鹿気た事はない。学問は学者になるものである。金になるものではない。」夏目漱石の『野分』の中の一節だ。

私はまだ将来の夢が明確に決まっていない。ただ大学で文学部に入って平安時代前後の文学作品を学びたいという漠然とした考えでいる。そのため将来文学系の仕事に就くかも、就けるかもわからない。そんな現状で、昔の難しい言葉が羅列しているこの作品を読んでいるときに「学問は学者になるものである。」という一文が現れて、それでよいのかと解決したような、またひとつ難しくなったようなことを感じた。主人公の白井道也は文学者であり強い信念を持った人物であるが、その信念の強さゆえに常にお金に困っている。そんな中で彼が演説で言った一言である。この言葉は良くも悪くも彼のことをよく表している一言だと思う。彼の言動は筋が通っていて想像していて心地が良かった。物事をたくさん知っていて、後輩には優しく時に謙虚であるが人付き合いが苦手な様は、まさに男らしかった。魅力にあふれた主人公であった。もう一人の主人公ともいえる道也の元教え子の高柳周作は道也と同じく人付き合いが苦手で物書きがうまくいっていません。この二人の対比が多く感じられた。同じような境遇にある二人が心持の違いでここまで大きく生き方が異なるということもよくわかった。どちらが夏目漱石をイメージしたものか気になって調べるとどちらも作者と似ている部分があったのでもしかすると作者の要素をふたりともにやってそれぞれの要素を極端化したものがこの二人なのではないかと思っている。

私が選んだ一文を含む演説で、彼は金持ちを猛烈に批判している。そこにはただの嫉みや恨みだけではなく金持ちだからと勘違いして威張っている人々を批判するものであった。

金持ちだからと言っても学者の本領では彼らは学者に頭を下げるしかないというものであった。これは現代でいう芸能人が専門外の分野でなぜか偉そうにする現象と同じだろう。その不満をぶつけた結果が多くの人が共感や痛快を覚えたために演説は大いに盛り上がったのだと思う。彼はお金の為でないといっても妻がいるため、しっかりとした職につくのだろう。そこまでは書かれていないが、彼は強く生きていけるのだろうと思う。

対して自分は漠然とした目標はありながらも、そこに向かって何をするでもなく固い信念があるわけでもなく、ただ茫然と日々を過ごしている。しかし今は自分が三年後、集中して学者になれるように、その堅い土台を作っていこうと思った。

令和3年度新宿区夏目漱石コンクール
読書感想文　高校生の部

佳作

こころを読んで

文徳高等学校　2年
福本　蒼依

作品名『こころ』
選んだ一行
あなたはそのたった一人になれますか。なってくれますか。

私は『こころ』を読んで「私は過去の因果で、人を疑りつけている。だから実はあなたも疑っている。しかしどうもあなただけでは疑りたくない。あなたは疑るにはあまりに単純すぎるようだ。私は死ぬ前にたった一人で好いから、人を信用して死にたいと思っている。あなたはそのたった一人になれますか。なってくれますか。あなたははらの底からまじめですか」というひとくだりが特に印象に残った。この文章は、「私」が先生の人生から生きた教訓を受けたいと言った時の先生の返答である。

私がこの部分を選んだのは、「あなたはそのたった一人になれますか」と言った後に、「なってくれますか」と言い直しているところに先生の本当の想いが表されているように感じたからだ。先生は両親が亡くなった後、無条件に信頼していた叔父に裏切られ、人を信じることを恐れるようになった。それに加えて、Kの気持ちを知りながらも一方的にお嬢さんを奪ったという過去の自分の行動が親友のKを自殺にまで追い込んだのだと考え、Kの亡き後も自分の過ちを反省し続けていた。その結果、先生から人と関わる機会を奪い、先生までも信じられないようにしてしまった。

「なってくれますか」という言葉を使った先生は、過去を一人で抱え、人に話せなかった事が本当は辛かったのではないか、また、裏切られることの恐怖、人との関りを持つことで新たに罪を犯すかもしれないという不安はありながらも心の中では本当は人を信じたかった、その葛藤が先生をずっと一人で苦しませ続けたのではないかと思った。過去に苦しめられた先生が「死ぬ前にたった一人で好いから、人を信用して死にたい」と言ったことや、あなたは信用してもいい人間かという趣旨の質問をしたこの部分は、初めて先生が自分を蝕む固い殻を打ち破る勇気を出し、信用という言葉を口に出すことで先生の心が救われた部分だと感じた。最終的には先生は過去を話して自殺することを選んだが、だれにも打ち明けないと話していた時と比べ、ただ一人信用できる人を見つけることができた先生の気持ちは晴れやかだったのではないかと思う。

たしかに先生の罪はその簡単に許されるべきものではなかった。しかし、先生の叔父との過去が先生に人に不信感を抱くようにさせた原因であることも事実だ。人にはそれぞれ規模は違っても人には言えない苦悩はあるだろう。叔父や先生のような人物は決して特別ではなく、先生やKの身に起きたことも絶対に無いとは言い切れない。だから、私は先生ばかりを責めることはできない。私はこの文章を通して、完全に人との関わりを断つことは難しいこの世の中で、自身の言動が人にどのように影響するかを十分に考える必要があると感じた。そして人を信用し、信用されるために人に誠実であろうと考えた。

読書感想文　選んだ一行

惜しくも入賞を逸しましたが、最終審査候補となった作品と、その「わたしの一行」を掲載します。

《中学生の部》

筑波大学附属中学校　1年

作品名　『こころ』

題　名　善人・悪人と人間を信じ切ること

選んだ一行　そんな鋳型に入れたような悪人は世の中にあるはずがありませんよ。平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間際に、急に悪人に変るんだから恐ろしいのです。

獨協中学校　3年

作品名　『こころ』

題　名　こころの自由

選んだ一行　「自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう」

日本女子大学附属中学校　2年

作品名　『こころ』

題　名　こころの表裏

選んだ一行　いざという間際に、急に悪人に変るんだから恐ろしいのです。

日本女子大学附属中学校　2年

作品名　『坊っちゃん』

題　名　常識

選んだ一行　清の方が赤シャツよりよっぽど上等だ。

日本女子大学附属中学校　2年

作品名　『坊っちゃん』

題　名　流されない道

選んだ一行　貴様らこれほど自分のわるい事を公けにわるかったと断言できるか、できないから笑うんだろう。

日本女子大学附属中学校　2年

作品名　『坊っちゃん』

題　名　真っ直ぐな心

選んだ一行　あなたは真っ直でよいご気性だ

《高校生の部》

学習院女子高等科　2年

作品名　『こころ』

題　名　こころに残る「後悔」

選んだ一行　『おれは策略で勝っても人間としては負けたのだ』という感じが私の胸に渦巻いて起こりました。

恵泉女学園高等学校　1年

作品名　『虞美人草』

題　名　ハバネロソースとピザ

選んだ一行　他人でも合わぬとは限らぬ。醤油と味醂は昔から交っている。

東京都立調布北高等学校　2年

作品名　『こころ』

題　名　理解すること、されること

選んだ一行　しかし腹の底では、世の中で自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していないのかと思うと、悲しかったのです。

淑徳与野高等学校　1年

作品名　『こころ』

題　名　鉛の裏

選んだ一行　私は鉛のような飯を食いました。

サレジオ学院高等学校　2年

作品名　『こころ』

題　名　人生の岐路に立ったとき

選んだ一行　「目的物がないから動くのです。あれば落ち付けるだろうと思って動きたくなるのです」

長野清泉女子学院高等学校　1年

作品名　『琴のそら音』

題　名　けしき

選んだ一行　寒からぬ春風に濛々たる小雨の吹き払われて蒼空の底迄見える心地である。

掲載は順不同です。